



十戒実践講座

第六章 姦淫してはならない/結婚を貴びましょう。



姦淫してはならない。

旧約聖書 出エジプト記20:14



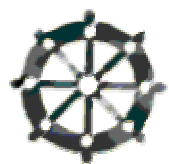
『姦淫してはならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。

新約聖書 マタイ 5:27-28



私通（の危険）に近付いてはならない。それは醜行である。憎むべき道である。

クルアーン 17:32



邪淫を慎むことは、正業である。

八正道



真の結婚愛は、その神的な起源から、天的であり、靈的であり、聖なるもので、純粹で、汚れなきものです。

結婚愛 64

姦淫してはならない。結婚を貴びましょう。

神よ。私にきよい心を造り、ゆるがない霊を私のうちに新しくしてください。詩編51:10

聖なる火

すべての宗教は、結婚は神聖で聖なるものと教えています。結婚の理想形は、あらゆる人間関係のうちで、もっとも親しく、充実し、高貴です。結婚によって結びつくことで、あらゆる宗教で教えること、互いを敬意や尊敬の念をもって、丁寧に扱い;互いに、愛し、大切にし;互いに善いことすべてをしてあげる-を実行するチャンスが二人の間に与えられます。つまり、黄金律「何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。これが律法であり預言者です。」(マタイ7:12)を実行するチャンスです。孔子の教えのなかにもあります。「我不欲人之加諸我也、吾亦欲無加諸人;自分にしてもらいたくないことは、人にしてはならない」(論語 公治長第五23)

結婚した人たち、または結婚したカップルと親しくつきあうようになった人は、本当の結婚にある関係とは、生きていて、有機的なものであることを知っています。時と季節によりますが、永遠に続く幸福と、もっとも深い静謐とが約束されます。例えば、次のインドの聖典からの教えをご覧ください。

夫が妻に喜び、妻は夫に喜ぶ家庭には、まちがいなく幸せは絶えることがない・・・神聖な文字によって妻と結ばれた夫は、いつも妻を幸せにし、それは季節を選ばず、来世でも変わることはない(マヌの法典 III:60; V:153)

イスラム信仰の聖典には、結婚はアッラーによって定められた聖なる結びつきであり、彼の愛のしるしとして与えられたものとされています。七つの「アッラーのしるし」としてとりあげられている、クルアーンの第三十章に明らかに記されています。最初のしるしは、地の埃から人が創造される奇跡を、そして二番目のしるしが、結婚の贈り物です。

またかれがあなたが自身から、あなたがたのために配偶を創られたのは、かれのしるしの一つである。あなたがたはかの女らによって安らぎを得るよう(取り計らわれ)、あなたがたの間に愛と情けの念を植え付けられる。本当にその中には、考え深い者へのしるしがある。(30:21)*1

*1 イスラム信仰では、結婚は選択肢ではなく、信仰の道の本質的な面です。聖なる預言(モハメッド)が言ったとされることです:「ああ、若き男たちよ! そうすることが出来る者はすべて結婚せよ。結婚を遠ざけようとする者は、私から出たものではない。」「人が結婚するなら、信仰の半分を果たしたことになる。」(アブドール・I・ドイ教授のインターネット掲載論文。ナイジェリア、ザイル、アハマツゥベロー大学 イスラム法研究センターのディレクター)

旧約聖書では、神の最初の祝福は、結婚の上にされています:「神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。・・・男と女とに彼らを創造された。神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。・・・」(創世記1:27-28)

神の当初の計画は、一人の男と一人の女が、夫と妻としてともに暮らし、結婚した愛の聖なる祝福を味わうというものでした。

インドの聖典では、結婚式は、「ヴェーダの秘蹟」であり、人がヴェーダの教えに導かれることに等しいものでした。結婚式の後の家庭の義務は、聖なる寺院で毎日行われる「神聖なる火の礼拝」に等しい、とされました(マヌの法典II:67)。ここで指摘しておかねばならないのは、この「神聖なる火」-結婚の本質をとらえた美しい句-は、霊的な精錬、をも意味するということです。結婚の誓いのもとに行われる鍛錬、自己抑制、そして無私の愛は、人の霊的成長にとって本質的なものです。精錬炉の炎の熱で金や銀が精製されてゆくように、「結婚」という聖なる関係は、人の内にある、粗野で身勝手なものをすべて清め、清く、純粹で貴重なものだけが残るようにするものです。スウェーデンボリイは、「一人の夫と一人の妻との間にある、真の結婚愛は、人生のかけがえのない宝であり、キリスト教信仰の宝庫です」(結婚愛457)と書いています。そして新約聖書では、「わたしはあなたに忠告する。・・・火で精錬された金をわたしから買いなさい。」(黙示録3:18)とあります。

先の旧約聖書の最初にある章では、「安息日に火を灯してはならない」との法を示しています。これは自己意識の炎のことであると述

べました-これは燃えて消えることのない「地獄の炎」であり、嫌悪・貪欲・身勝手な熱情のことです。しかし、別の炎があります。清め浄化する炎です。これは神の愛の炎です。恋に落ちた者の心の中に、この天界の炎がともれば、結婚してその(いのち)のうちに燦々と燃え上がります。これは聖なる炎であり、「火は、絶えず祭壇の上で燃え続けさせなければならない。消してはならない」。(レビ記 6:13)

そして、結婚した関係は、人類が体験しうる最高の幸福と、平和の可能性を秘めています。それはまた、霊的な精錬炉でもある、男と女のうちに、最高のものを生み出すことができる、神が定めた関係です。結婚の聖なる結びつきは、人を閉じこめ、制限しようとするものではありません。むしろ、身勝手な欲望の専横から解き放ち、邪悪な意志のさそいを乗り越え、自らの高貴な性質を目覚めさせようとするものです。それは神からの最大の贈り物であり、決していかようにも犯してはならないものです。そのため、「姦淫してはならない」という神のみことばは、石板だけではなく、人間の心の上にも書かれました。

姦淫の範囲

神は「姦淫してはならない」と語られ、それは人の心の上にも書き込まれましたが、その原点と重要さは忘れ去られたようです。その結果、姦淫について混乱し、人間関係において、性のあるべきところにも疎くなってしまった人が増えてきました。従って、様々な疑問がわき起こります：

性は、飢えや渇きと同じように、満たされなければならない基本的な欲望ではないか？

性的表現は、生来与えられている自由ではないか？

性は、人のユニークな個性を発揮し、他の人間と結ばれる素晴らしい方法ではないか？

結婚外の性であっても、関係者が皆納得するなら、何も悪いことはないのでは？

自分の人生が生き返り、活力と幸福を与えてくれる、結婚外のこの激情を何故奪われねばならないのか？

この戒は、社会の秩序を単に守るためのものではないのか？

この戒の制約を超えて、進化してもかまわないのでは？

これら様々な疑問は、この戒にまつわる混乱と、誤解を示しています。この章では、結婚した人、そして結婚していない人、死に別れた人、離婚した人すべてに、適用できるよう、十分に説明しようと試みてみます。「姦淫するなかれ」という言葉の内に、神の愛と、憐れみと赦しのすべてが含まれていることを示してみます-ただそれを聞き入れようとしていただけなら。

専門的にいえば、肉体的な姦淫は、結婚の誓約を外れた自発的な性交渉をいいます。英語の「adultery：姦淫」は、ラテン語の “adulterate” からきており、これは、異質のものや不適切な要素を加えて、「不純とする」または、「汚す」を意味します。それは、純粋であるものを、不純に；清いものを汚れさすものです。商品の広告でも、「純粋で、汚れのない」と表現されるものもあります。これには、何物も混ぜたり、加えません。

この考えを、結婚の領域に持ち込むと、十戒にあるように、「姦淫してはならない」ということになります。つまりこれは、肉体的な姦淫を犯すことだけではなく、「みだらなことを喜んだり、行ったり、汚れたことを考えたり、話したりする」(真のキリスト教 313) ことも含まれています。イエスが言ったように、

『姦淫してはならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。
しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。(マタイ 5:27-28)

「汚れた男」や「汚れた考え」を持ち、「汚れた冗談」を言い、「汚れた心」を持つ人々のことを語るとき、私たちのほとんどは必ず、性の倒錯や結婚を汚すことをイメージします。そんな人々は、公然と姦淫を犯しませんが、心は汚

れ、不潔なものとなっています。思考と言葉は、純粋なもの「結婚という考え」を考えても、不純なものとしてしまうのです。

さらに深くいえば、神のみことばの真理を、自分の身勝手な動機と「まぜてしまう」とき、いつでも「霊的姦淫」を犯すことになります。自分の考えや、言葉、行動を正当化するために、聖典を不正確に用いることです。それは例えば、聖典を、自分自身の心や知性を点検するために用いるのではなく、他人を非難するために用いたときに起こります。この章では、姦淫を禁じるこの戒の様々なレベルを見て、毎日の生活でこれを犯しうる可能性をもつ様々な例をあげてみます。しかし神は、私たちそれぞれに言うておられます。「背信の子らよ。帰れ。——主の御告げ。——わたしが、あなたがたの夫になるからだ。」(エレミヤ 3:7,14)

現代文明における姦淫

今日の世界では、私たちは魅惑的で、ひきつけられる容姿の、男性や女性のイメージに取り囲まれています。ソーダや、石けん、自動車、歯磨きや健康用品、薬など、本来は性的なものとは本来無関係なものを販売するため、性的表現に富む広告が、あふれています。洋服のスタイル、人気音楽の歌詞、小説の脚本、おおかたの映画の内容も性欲を刺激するようデザインされ、作られています。若者達も、おそらく以前よりは、貞操は古くさい考えであり、性的な行為が社会的成功や、実現、幸福の鍵であるような環境の中で生きています。それはまるで、人々が時間を超えて貴ばなければならない教え、「姦淫するなかれ」を忘れてしまったようです。

二千年前のイエスの教え、一だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。一は今日においてもなお、警鐘として鳴り続けています。それは男性であれ、女性であれ、変わることはありません。そのため、私たちは結婚を貶めるような可能性のあるものすべてを、広く見つけ出さなければなりません。例えば、これはテレビや映画で、婚外交渉に対する激情を見たり、性的に過激な広告が載っている雑誌のページを、じっと眺めたり、性的な感情をもよおさせる風に、魅力的な男性あるいは女性の姿をみつめたり、そしてまた、この戒を破るような空想を心の中で思い描くことで起こりえます。例えば、テレビのチャンネルを回したり、雑誌のページをめくったりして、視界や意識の中をよぎることで問題は問題となりませんが、自分でそのチャンネルを選択し、自分でそのページを読もうとしたり、自分が選んだ姿を思い描いたり、心のうちでじっと思い描いたりしたときには、問題となります。ゲーテの有名な詩劇、ファウストでは、主人公は、時に対して“Verweile, du bist so schoen”（止まれ、お前は美しい）と呼びかけたときに、倒れます。*2

*2 この古典のあるシーンで、ファウストは悪魔に対してこう言います。「取引をしよう。もし私が、過ぎゆく時に対して、留まれ、お前は美しい！ と呼びかけたなら、お前は私を足かせにつなぐがいい。その時、その場で、私は喜んで滅びてやろう！」ファウスト 第一部

次の例では、幸せな夫婦の、中年の行政官が、ある魅惑的に着飾った女性の姿をずっと頭に思い描きたいとの欲望と闘っています。

私は、神は、他の創造物と同じように、女性は見て楽しむように創られた、と信じています。しかし、その衣装のいくぶんかは、悪魔が造ったものだ結論するようになりました。今日女性が身につけている服は、ただ見るだけで、思考を容易にひきつけてしまいます。ある田舎のショッピングセンターで買い物をしているとき、ある店から出て私たちのすぐ前を歩き出した、魅力的なうら若き女性がいました。彼女は、透け透けの、ひらひらしたミニスカートを身にまとっています。この場所にいる人は皆、彼女に惹きつけられてしまうことでしょうか。私は戒と課題のことを思いました。そして、この誘惑と闘う強さを祈りました。するとキリストから、その力を頂いたことを、誇って語れます。私は、なんらの妨げもなく、主と今までの良い関係を続けてゆくことができたのです。

三〇才の囚人が、ポルノ雑誌を読みたいという誘惑と戦いながら、自分のもつイスラムの信仰にすがります。

この一週間すべて、ポルノ雑誌をみたいという欲望と闘ってきた。それは頭の中をよぎるが、私はまるで、スイッチを切るように、その思いを断ち切った。だからこの戒を守り続けることはできると思う。何年かイスラムの教えを受けたが、なかでも自制の教えに心惹かれた。「姦淫するなかれ」という戒も、そうだ。イスラウの教えによって、女

性をまったく違ったふうに見ることを教わった。—それは昔私が女性を見ていたものとは全く違っている。私は今や女性に対して、敬意をいざくことができる。

この囚人は、自分の宗教から、女性を性欲からではなく、敬意を持って見ることを学びました。「男の信者たちに言ってやるがいい。(自分の係累以外の婦人に対しては)かれらの視線を低くし、貞潔を守れ。それはかれらのために一段と清廉である。」(クルアーン 24:30)。今まで見たきたように、現代文明の姦淫的メッセージの攻撃から、身を守るには、この種の霊的鍛錬の錬磨がまちがいに必要です。

早期の警告

姦淫的な感情は、たった一目で、わきはじめ、消しがたい情動は、すぐ灯ります。家庭でうまくいっていない夫や妻が、結婚の外に愛情や親切、価値を見出すと、特にそうです。人はすぐに理屈をつけ始めます:「私のつれあいは、完全ではありえない。一人の人間に、私の要求をすべて満たしてもらうなんて、非現実的だ」。こんな人は、慰められたい、理解してもらいたい、正しく認めてもらいたいという望みがあれば、それが満たされる関係は、正しいだと思いはじめられるかもしれません。その関係は、「洗練された」やりとり、あるいは好意の交わし合い、ちょっと長めのハグ(抱擁)、軽い食事、公園の散歩、あこがれのまなざし、また自分のつれあいが興味がなくて、あるいは暇がなくて、とりあってくれない話題を深く話し合ってくれることで始まるかもしれません。これらは、「汚れた炎」をもてあそび、一気に本格的な情事に発展し、苦悩と苦痛と悲劇で終わりがねない危険性をいざくしている、一触即発の事態なのです。

この姦淫のレベルは、あまりに微妙であり、それが起こっていることすらほとんど気づきません。それは独身の人間であってもそうです。次の文は、結婚に対して、深い尊敬の念を抱いている、独身の女性が、いつのまにか姦淫を犯している自分をみつけたものです。初めは無垢な気持ちで、いつのまにか姦淫の欲望になってしまうかという、感動的で、示唆に富む説明がされています。:

私たちの教会は、「開かれた」教会です。それは、私がラリーに接近した理由の一つでもあります。彼は、教会では新人であり、彼が何を望んでいるかを知りたかったからです。

ある日の礼拝後のことでした。牧師が家を開放して、皆を招いてくれました。10分ほど車を運転していましたが、私はずっとラリーのことを考え続けていました。心の中に、ラリーの素晴らしい性格を繰り返し思い浮かべ、彼が来てくれたならいいと思っていました。私道に車を入れ、ドアを閉めて、牧師宅にやってくる人たちを待ちながら、しばらく車に座っていました。私は、ラリーと一緒にいればどんなに楽しいことだろう、彼は本当に素晴らしい人、家庭や教会について交わした会話の内容も健康的で、素晴らしかったと、あれこれと忙しく思いめぐらしていました。どうやったら彼に連絡を取って、「彼が教会の行事に参加してくれる」だろうか考えました。私は、自分がラリーと、「無私で愛をこめた」方法で、連絡することを考えていました。

この時点では、「姦淫」と思われることはほとんど見つけ出すことはできません。新入の信者に連絡して、教会行事に参加させようと思ふことは、全く無垢の事柄です。若き女性は、自分の車の中に座って、ラリーのことを単に「無私で愛をこめて」考えていました。しかし、何かが変わりました。

私は、彼と仲の良い妻、キャロルのことを考え始めました。二人の仲に何か問題があるとは、知っていました。彼らが教会で、一緒に座るのを見たことがありませんし、自分は二人が問題を解決できないでいてほしいと望んだことも覚えています。私はキャロルに敵意をもっているわけではありません—彼女が私の想いの内に入って欲しくないだけなのです。私はこう考えたことを、はっきりと覚えています。「キャロルとしては、うまくゆかないんだ」。そしてまた、こう考えて、うれしかったことを覚えています。「だったら、いいことだわ」、私は自分にそう言いました。その時、暗い力が、私を支配しているかのように感じました。突如、私はあることを閃いて、息を飲み込みました。「結婚のことをそう考えることができるなら、私は自分の欲しいものを得るために、何でもできるはずだ! 本当に何をしてもいいはずだわ?」驚いて、思わず目が丸くなってしまった経験でした。自分がこんなに低いところ、人の結婚が破綻すればと望むようなところまでゆきつくとは。

彼女が、結婚を貴ぶべしという環境の中で育ったとしても、この女性が姦淫に対して、免疫があるというわけではありません。そのため、突如として、人の結婚の破綻を願うことさえあるのです。自分の心の内で起こった恥ずべきことに対して、恐怖に襲われ、祈らなければならないという考えが起きました。

彼らの結婚のために祈りました。自分から嫌悪の、そして身勝手に姦淫的な思考を、取り除いていただくよう祈りました。すると私がいた悪のスフィアから、たちまち解き放たれた感じがしました。祈りによって、こんな力を経験したことはかつてありません。私自身、はじめて、祈りが自分を明らかに変えてゆくことを体験しました。彼らの結婚のことを祈ると同時に、二人に対して、人としての愛を感じ始め、それ以降、私はラリーを、キャロルの夫としか見なくなりました。

これは、「新人を教会の行事に迎えたい」という、無垢の望みが、次第に無垢とはいえないがたいもの一人の結婚が破綻するような欲望に変化してゆくかという例です。幸いなことに、この方は、この早期の警告を読み取り、神に助けを求めました。

しかし、しばしば、私たちは「不吉な前兆を読み取る」ことなく、手遅れとなるまでその警告に気づきません。結婚してから7年、二人の子どもがいる、アミイとジムの話を考えてみてください。ジムは、仕事で旅から旅の状態、アミイは孤独です。女の友人が「ジムには、あなたが必要としていることすべては果たせないわ」と言ったとき、アミイはそれは本当だと思いました。するとしばらくするうちに、自分のことに「耳を傾け」、「理解してくれる」男性に巡り会いました。この新しい関係が深まり、一緒にいる時間が長くなってゆくとともに、早期の警告は、心に届かなくなり、「友情」は情事となってしまいました。

アミイは、自分の残りの人生を偽って生きることができないと気づきました。自分の行いの原因となった、夫の不在を責めるより、彼女は自分の行動の責任をとろうとしました。彼女は関係を解消し、夫に赦しを得る強さと謙虚さを求めて、神に祈りました。それは何よりも困難で、苦しいことだったはずですが。それにもかかわらず、二人はやり直してゆこうと決心しました。彼らは、カウンセリングにおもむき、そして一緒になって祈りました。自分たちの関係を正直に見つめ、互いが優しく心を開き合おうと決心しました。そして互いに耳を傾け合おうとしました。彼らは、これからも長い道のりが待っていることを知っています。そして、かつて二人が持っていたような愛と信頼を取りもどすことは、困難なことでしょう。しかし、二人はそれが努力に値することであることを知っています。発つべき価値のある旅であると。

ここで、少し時計の針を戻して、アミイが他の男性に惹かれ始めたころの彼女の(いのち)を見てみます。彼女は、自分が他の男に惹かれていることを、夫に告げるのは難しかったでしょう。しかし、不倫の関係になってから、それを告げるよりも、はるかに容易なことであったとはずです。さらにまた時計を戻して、4年前に戻り、アミイが結婚の内になにか物足りなさを感じ始めたころにもどってみましょう。そのとき、アミイがジムに愛していることを表現し、彼と共にいることがどれほど楽しいかを語り、一緒にいてくれることをどれほど望み、ジムがいないと、どれほど悲しいかを話すことは、どんなに簡単なことでしょうか。

願わくば、ジムが彼女の言葉を、愛の優しい証、そして二人の結婚への思いやりとして、理解を示してくれればと思います。おそらく、彼のほうでも自分たちの結婚に、注意が必要であることを知っていたはずですが。たぶんジムも、自分がどんなにアミイを愛し、自分たちの結婚を気遣い、自分が離れているとき、どんなに悲しいかを語ってくれたに違いありません。二人は、より一生に在る時間を求めて模索したでしょう。自分の出張に妻を伴ったり、出張を減らしたり、新しい仕事を探すことさえもできたでしょう。そうすれば、互いの心を開きあい、神に対しても心を開いたことでしょう。私たちが、結婚関係に対して、この種の勇気や、正直さ、そして素直な心を持つことができれば、早期に警告を感じとることができ、関係が破綻したことで生まれる苦痛や苦悩を、避けることが可能となります。

不幸なことに、多くの方は、この早期に警告を感じとることができません。あるセミナーの参加者が書いているように、「もし私が、自分の行ったことで、どれだけ多くの人を傷つけるかを知っていたなら、決してそんなことはしなかっただろう」。次の文をお読み下さい：

5年前、私はシンシアと会いました。私たちは同じビル、同じ事務所で働いていました。最初は、友として、たまに会話をしたりで始まりました。そして、ある日、ランチでもと誘いました。そのとき、妻とは結婚して14年目でした。全く問題のない結婚生活でした。そのスタートは素晴らしく、二人の子どもできました。しかし、あまり会話もなくなり、年を重ねるごとに、性的な関心も薄れてゆきました。私はこの状況を受け入れたつもりでしたが、決して幸せとはいえませんでした。時に憂鬱な気分が悩まされました。

それが、シンシアに会ってからは、まるで別です。この明るく、魅力的な女性が私を慕ってくれるとは、信じがたいことでした。私の中で長く眠っていた、新しい感情が、この新しい関係によって次から次へとよみがえってきます。シンシアが、私をよみがえらせてくれたかのように。私の憂鬱は吹き飛んでしまい、全く新しい世界が、開けたかのように。妻と別れ、シンシアと結婚することを決心しました。

そして、そうしました。

5年たった今、あの魔法は消え去ってしまいました。シンシアと会う前の自分にもどってしまいました。新しく結んだはずの関係は、私の憂鬱の回答ではありませんでした。誰か助けてください。

この文が示すように、他のだれかに心が移ることは、結婚の中で何か足りないことのサインであることが普通です。*3 結婚した二人は、他の人々と真の友情を交わすことができないというわけではありません。しかし、その友情は秩序の内に行われるべきであって、姦淫を禁じるこの戒を犯してはなりません。つまるところ、友情が「一線を越え」てないかどうか、そして姦淫的な魅力に囚われていないかを自分自身で判断しなければなりません。早期の警告を、感知することで、結婚を立ち止まって振り返り、互いに耳を傾けあい、満たされぬものを論じあい、導きを求めて祈り、より充実した関係へと進むことができます。

*3 他のひとに心が引かれるのは、必ずしも結婚の中で、何か足りない場合だけではなくあります。あるセミナー参加者は、「私にとっては、夫以外の誰かに惹かれるのは、結婚に何か欠けている兆候ではありません。私の中に病み、悪いところがあるせいです。」この問題に関しては、この章で後ほど詳述します。

満たされぬ要求

結婚への準備は重要であり、結婚の誓を交わすまで長い時間をかけるべきだということには、たいていの人が同意してくれるはずですが。理想的には、両親が互いに愛し合い、健康的な会話の例をみせてくれるような、温かく愛のある家庭の中で育つところから、その備えははじまります。加えて、結婚愛が尊重され、尊ばれ、奨励されるような社会に住むことです。

不幸なことに、これは現実というよりも理想にしかすぎません。大勢の方が、虐待や中毒、離婚によって壊れた家庭で育っています。それらの方々は、「個人の自由」を盾に取って、様々な関係を構築しながら、それに参加してゆくことを低くみる環境の中で育っています。そんな環境の中でも、両親たちは、「子どものために、なんとか我慢」し、二人の問題を解決し、健康的な方法で交流することを学び切れていないようです。二人は、恋人として結婚関係には入ったものの、友人としての関係は、築けないままです。これは尤もなことです。なぜなら、完全な環境で育ってきた人は、ほとんどいないからです。そのため、人は広い範囲で、満たされぬ要求と、非現実的な期待をいだきながら、結婚関係へと歩み出します。

1960年代と70年代、結婚の関係を豊かにすべしという、「新しいパラダイム」の社会理論が唱え出され始めました。「開かれた結婚」と呼ばれます。この理論は、一人の人間だけで、すべての要求を満たすことはできない、と説きます。ただ誰かと結婚しさえすれば、人は永遠に幸せで、安全で和むと、信じることは悪いことだと説きます。伝統的に、性的忠実さが結婚の理想とする考えに挑み、婚外交渉が現に、結婚生活を「より活性化」させ、「より充実させる」ことになると主張するのが、彼らの冠とした理論です。要するに、伝統的な「閉鎖的結婚」は、狭く、息苦し過ぎるので、もはや役に立たないと論じたのです。続いて彼らは、こう展開しました。「性を伴おうと、伴わずとも、愛の輪を広げ、開いた世界で次々と新たな関係を築くことだけが、自然な成り行きだ」*4

*4 Nena O`Neil and George O`Neil, 開かれた結婚: カップルにとっての新しいライフスタイル (New York: M.Evans and Co., 1972), 257

この社会理論が、全く間違っているわけではありません。彼らは、「相手を所有しない」、「裁かない」そして「開かれた」ということの重要性を強調しており、これは結婚においても皆、重要なことです。しかし、開かれた、相手を所有しないという「新しい宗教」は、神の戒を離れては、意味をもちません。性的関係を伴おうと、伴わなくとも、深く、そして開かれた関係は、一見輝き、刺激的なものであったとしても、それが結婚を外れたものであれば、結局は「まがいものの金(黄鉄鉱)」でしかありません。何千もの人々が、自分のロマンを求め、この幻のパラダイスでそれを見出したとしても、(いのち)は砕かれ、家族は壊れてしまいます。

1986年、マサチューセッツ州のボストンにある、個人のグループが「セックスと愛、無差別中毒症」の第一版を発行しました。それは、セックスや恋愛中毒は、どんな麻薬よりも、強力で、破壊的で、そして強い幻覚を産みだすものであると、系統だてて断言したものです。なぜなら、それは実にうまく、「本当のこと」を仮面で覆ってしまうからです。このグループのメンバーは、セックスと恋愛への執着は、神のみが満たすことのできる空虚を、満たそうとする、決してかなわない試みであると、満場一致で証明しました。これを書いたメンバーの一人が書いています。

私はちに自分がなぜ、そうしてどんなに、こんな満たされぬ関係を続けていたか、説明する方法を見つけることができました。私は中毒だったのです。他人によっては決して満たされぬ、空虚を埋めようとして、恋とセックスの相手を求めていたのです。この

空虚は、ある部分では、精神的な空虚でした:この精神的な大きな空虚を埋めようとして、セックスと恋愛を遍歴しても満たされることはありませんでした。・・・私の餓えは、精神的な種類の愛であったのです。

この方は、セックスと恋愛は、自分が「精神的な大きな空虚さ」と呼んだものを満たすには、全く十分ではないと理解するようになりました。この「名付けようのない、そして底知れない空虚」と表現される、虚しさに関して、セミナー受講生が書いています:

私はアル中の父とともに育ち、私自身も中毒的な行為に慣れ親しんでいました。自分の人生を振り返ると、私の中毒は10代に始まっています。私の両親が離婚し、そこから生まれた、名付けようのない、そして底知れない空虚を、ずっと埋めようとしてきました。私は、そのころから、たくさんの人とつきあい、若いころも、たくさんの男友達とつきあい、そして結婚しました。恐ろしいことに、結婚して2年半しかたないのに、またむなしさが心を包み、別の男性に惹かれる自分がいました。「熱が冷め」、親友にそれを打ち明けるまでは、このことを誰にも言いませんでした。それが結婚の外で魅せられた、最初の男性でした;しかし、そのあと何人もそんな人ができたのです。つまり、私は素晴らしい人と結婚したはずなのに、いつも他の男性と恋に落ち続けたのです。

それでも、15年間、愛と強さの残った結婚生活を続けることができましたが、最悪の事態が待っていました。深く惹かれてしまったのです。私は、本格的な中毒に陥ってしまいました。幸いなことに、肉体的な姦淫を犯す直前に、目をさますことができました。私は助けを求めて、静かな叫び声をあげ、神の救いがずっと自分のそばにあったことに気づきました。そこから私の人生は変わりました。

その目覚めの年から、中毒症状を脱するには、ほぼ一年かかりました。それは自分の人生の中で、最も苦しい時でした。私は毎日、12段階プログラムに取り組みました。毎日、〈いのち〉を神の愛に委ねました。痛みは始末におえないほどなのですが、私は歩み続けました。すると、ある日、心が緩むかと思うと、何かが切れました。私は怖れました。底の見えない崖に飛び込むようなものです。すると、温かく支えるような風がふき、私を持ち上げてくれるではないですか。「生まれ変わった」ような経験であり、その日から私は後を振り返っていません。

今の私には、真実は一つしかありません。それは神です。結婚生活への祝福が、たくさんありました。

ごく簡単に言えば、神のみが自分の心のむなしさを埋めてくれるとわかったとき、これらの人々の〈いのち〉に変化が起きました。物質的なものには、これはできません;名声や名誉、そして他人の良い評価もできません;麻薬やアルコールもそうです:ましてセックスや恋愛も。これらへの期待は、山のようにそびえてはいますが、人の魂にあるその特別な場所を満たすことができるのは、神お一人だけです。人が神に心と知性の内に来ていただくこと、すなわち十戒をただ守ることによってのみ、その虚しさが埋められ、奇跡的な充実を味わうことができます。すると、結婚においての真の愛は、欲求によって生まれるのではなく、豊かに満たされることです。それは、「恋に落ちる」ことではありません。〈いのち〉によって満たされ、愛に源を発するものです。「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。」(ヨハネ 10:10)「あなたの主は、最高に恵み深い」(クルアーン 96:3)と聖典にあるとおりです。

感情の誘惑

感情の誘惑は、微妙な姦淫の一つです。それが、独りよがりであれ、自己憐憫であれ、怒りであれ、食欲やその他の感情であれ、その誘惑的な力に気づかねばなりません。望まない感情が私たちを、そそのかし、刺激していることに気づかねばならないのです。それは時に、自己抑制できなくなるところまで至ります。たとえば、ちょっと火遊びをして、不適切な性的感情をもよおし、これをずっともてあそんでいると、後戻りのきかないところまでやってきて、燃え上がってしまいます。負の感情、不適切な感情にも同じ事がいえます。それゆえ、誘惑的な感情をもてあそんだり、長々ひきずったり、屈服したりするような試みがあれば、きわめて警戒しなければなりません。次の例をご覧ください:

悪い知らせの手紙がきました。それを読んで、テーブルの上に放り投げながら、傷心と自己憐憫の感情がわき上がってきます。この感情が深く、深くなるよう引きずられてゆく誘惑を感じるすることができます。感情は鈍くなり、しびれ、ベッドの中に這って入りますが、自己憐憫も一緒です。それを一緒に抱き込んだまま、忘れてしまおうと、眠りの中に逃げ込みます。

信じていた人に、裏切られます。傷つき、失望します。どうしようかと、様々な考えが頭を巡り、そのそれぞれに魅入られます。思い

巡らしながら、冷蔵庫の扉をあけて、チョコレート・ケーキの残りに目がとまります。なかなか心をそそります。「ちょっと、ひとかけくらいなら・・・」。三つたいらげてしまった後、気分は全くおさまらず、逆に前より悪くなっています。

つれあいが、自分に相談もせず、決めてしまいました。怒りがわきおこり、自分を取り囲もうとしています。それを振り払おうとしますが、つきまとい、強いて、そそのかしてきます。積み上げてきた怒りに抗しきれず、ついにつれあいに向かって爆発です。結局、鬱積した怒りをすべてぶちまけ、感情を絞りきってしまいました。あとは疲れ果てた自分が残っているだけです。*6

*6 誘惑者デリラがサムソンの強さを探りながら、「毎日彼女が同じことを言って、しきりにせがみ、責め立てたので、彼は死ぬほどつらかった」（士師記 16:16）。感情の誘惑は、力強く、しつこいものです；ある特定の負の感情が、私たちが屈服するまで、終日つきまといます。

私たちはだれでも、このリストにたくさんの例を加えることができるはずです。負の感情は私たちに誘惑し、自己弁護と復讐から、怒りにみちた手紙を書かそうとします。友人に電話して、自分をたくさん傷つけた人間への、きつい不平をくどくど言って、慰めを見出します。苦痛をまぎらわすため、大酒を飲み、または他の何かに走ります。自分の怒りをおさめるには、誰が傷つこうと、それを「吐き出して」しまうことだと、ささやきます。自分の娘に怒りを爆発させた、eメール参加者の文です。

私にとって、この戒は、楽々こなせるものだと考えていました。なぜなら、私は結婚した時、処女であり、その後12年間まったく姦淫など犯そうとも考えなかったからです。不幸なことに、負の感情への姦淫を犯すかどうかの課題にくると、自分はしくじっており、いいえそれどころか人生毎日、自分はこの戒を犯していることに気づきました。怒りや憂鬱、そして憤り等を起こす際の、みっともない言い訳。いつも、都合のいい言い訳を使っています。「まあ、その怒りを私の内から追い出せれば、すばらしいわ。—私が清くなれば、きっと癌にもならないわ。」—でも、自分の爆発で、幼い女の子をととも傷つけてしまうことなんて気にしていませんでした。「ああ、世間は私を正しく評価してくれない！ 皆には、私の素晴らしい才能と貢献がわからないのよ」。私はそれを一日中わめきちらしていました。これは難しい課題です。

これを書いた方が言っているように、負の感情の誘惑にあらがうことは難しいことです。負の感情への誘惑に屈服するたびに、人は「囚われの家」にもどります。その感情が「人を支配し」、奴隷とし、人を思うがままにあやつります。すると人は、再び「エジプトの奴隷」となってしまいます。それゆえ、自分が屈服し、弱まり、譲歩しそうになるたびに、聖典の教えに固く立つことが重要です。例えば、旧約聖書にある、次のヨセフの話をお考え下さい。

ヨセフは体格も良く、美男子であった。これらのことの後、主人の妻はヨセフに目をつけて、「私と寝ておくれ。」と言った。しかし、彼は拒んで主人の妻に言った。「・・・あなたのご主人の奥さまだからです。どうして、そのような大きな悪事をして、私は神に罪を犯すことができましょうか。」（創世記 39:6-9）

ヨセフが、この誘惑に対してどう闘ったか、その内面の闘いは私たちにはうかがい得ません。しかし、彼は固く耐えて言いました、「あなたのご主人の奥さまです。どうして、そのような大きな悪事をして、私は神に罪を犯すことができましょうか」。ヨセフの応えの重要な点は、姦淫は単に、道徳上の罪（女性の夫への罪）ではなく、より大切なことに、それは神への罪であると知っていたことです。私たちが、負の感情の誘惑を感じる時は、いつも状況は同じです。誘惑に屈し、完全に敗北して、「エジプトの奴隷」となるか、それともそれを乗り越えるか、です。ヨセフと同じことを言うことができるはずで、「いいえ。それは神への罪です」。

「行動のうちに」自分自身を見極める

新約聖書に、姦淫を犯してつかまった女性の話があります。糾弾者たちが、その女性をイエスのもとに連れてきました。そして、「先生。この女は姦淫の現場でつかまえられたのです。モーセは律法の中で、こういう女を石打ちにするように命じています。ところで、あなたは何と言われますか。」とイエスに言いました。（ヨハネ 8:4,5）旧約聖書で、姦淫を犯した者は、二人とも殺さなければならないと命じられているのは本当です。（レビ記 20:10）しかし、イエスはより高い教えを与えようとされました。

けれども、彼らが問い続けてやめなかったので、イエスは身を起こして言われた。「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。」そしてイエスは、もう一度身をかがめて、地面に書かれた。彼らはそれを聞くと、年長者たちから始めて、ひとりひとり出て行き、イエスがひとり残された。女はそのままそこにいた。

イエスは身を起こして、その女に言われた。「婦人よ。あの人たちは今どこにいますか。あなたを罪に定める者はなかったのですか。」

彼女は言った。「だれもいません。」そこで、イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。今からは決して罪を犯してはなりません。」(ヨハネ 8:7-11)

聖典を読むときの鍵は、話に出てくる、それぞれの人物は、人の内にある様々な面をあらわしていることに気づくことです。どんな話でもすべて、私たちのことが書かれています。他人のことではありません。これを心に銘じた上で、姦淫を行って捕まった女性のことを考えてみましょう。どんな意味をもっているのでしょうか？自分が肉体的、心情での、そして精神的姦淫を犯したとき、どうすればよいのでしょうか？どうすれば、解決することができるのでしょうか？どうすれば、もとに戻れるでしょうか？

女性が裁かれるために神殿に連れられてきたとき、イエスが言われ、女性が応えたことを振り返ってみましょう。イエスは実に明快に、「行って、もう罪を犯すな」とおっしゃいました。歴史の中で、最も短い結婚カウンセラーであったでしょう！しかし、女性が愛と知恵にあふれたこのみことばを心から聞くためには、自己弁護したり、正当化してはならなかったのです。責める人間が周りを取り囲むとき、人の防御的な性格が、本当に聞かなければならないことのじゃまをします。女性への「告発者」が、すべていなくなったとき、彼女は防御を行わなくなり、イエスに耳を傾けました：「私もあなたを責めない：行って、もう罪を犯すな」。

さて、自分が「告発者」で、女性を石で撃とうとしていると思ってください。女性のしたことに対して、私たちは皆、腹をたて、怒っています。同時に、モーセから与えられた法は、姦淫を犯した者は、石で殺さなければならないとしています。そのため、自分の行おうとしていることは正しいと考えています。聖典において、「石」という言葉は通常、「あなたの主なる神を愛せよ。」や「寂静の道こそを、育てよ」(法王教 20:13)；「貞節であって、欲深くあってはならない、そして他の愛人を得てはならない」(クルアーン4:25)などという真理を意味しています。これらの教えは、私たちが幸せに生きるよう、そして結婚愛の祝福を享受し、善き人々になるため、私たちに与えられたものです。これらの「石」は、私たちが尊び、愛すべき岩のように固い原理です。私たちがこれの原理の上に立てば、動じることはありません。私たちは、完全な人となり；「岩の上に自分の家を建てた賢い人」(マタイ7:24)のようです。

しかしながら、私たちが「告発者」となれば、その手にある石は、もはや同じ原理を象徴しません。真理は虚偽となり、その中にある善は、穢されます。このレベルの姦淫は、「冒涇」といわれます。これは、私たちが真の原理を、神聖な脈絡の外に持ち出し、自分の行動を正当化したり、自分の欲望を満たし、自分を讃えたり、他人を非難したりしたとき、必ず起こります。例えば、「あなたがたは互いに愛し合いなさい。」(ヨハネ13:34)という真理は、ねじ曲げられ、性的乱交を正当化するために輪異教されることができます。パウロの言葉、「私が知り、また確信していることは、それ自体で汚れているものは何一つないということです。」(ローマ14:14)は、ポルノへの耽溺を正当化するのに用いることができます。「さばいてはいけません。さばかれないためです。」(マタイ7:1)という美しい教えも、他人に向ければ、自分の罪深い行いを隠し、正当化することができます。そして、姦淫で捕らわれた女性のケースで、告発する者たちは、「姦淫してはならない」という戒を、女性を激しく撃ち、傷つけ、殺してしまう、糾弾の石として用いました。戒自体は真理です。しかし、慈しみなしに用い、自分の利益を正当化するために用いるならば、虚偽となります。*7 これらの例はすべて、神によって本来創られた精神を外れてしまうよう、ねじ曲げられたものです。

*7 スウェーデンボリは、「善の欠けた真理は、虚偽となった真理です。真理はそのうちで虚偽となっています」(黙示録解説 781:12)、と書いています。「もし真理が悪に味方するように虚偽となれば、この混ざり合いは、冒涇です。(天界の秘義 9818:27)。前に出た、裁かず、所有せず、開かれたという基本的な価値が、結婚の誓いの外にある性的関係を正当化するのが、いい例です。

この話は、意味深いことを伝えています。「姦淫の行い」にいる自分自身を捕らえ、あるいは怒れる告発者に指摘されたとき、人は清い心と、固い精神を求めて祈ることができます。糾弾の石を置いて、神に祈って赦しを求めめるための、祈りの祭壇を設けることができます：「私たちの負いめをお赦ください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。」すると、主に立ち返ることができ、慈しみ深い哀れみの言葉が聞こえます。「私もあなたを責めない。行ってもう罪を犯すな」。

新しい〈いのち〉を始める

二人の人間が出会い、恋に落ちたとき、人が知りうる中で、最も純粋で、最も高貴な感情のいくつかを体験することができます。それは、多くの人々にとって、宗教的な色彩においてはじめて表現できる、並はずれ、神秘的で、「この世のものとは思われない」経験です。自分の愛する者は、「天から送られた、天使」であり、その関係は「天国のよう」であり、二人は、互いにすべてを「捧げあい」、互いのためなら、喜んで「命を捨て」ようとするでしょう。その愛は、「高価な真珠」であり、二人はまるで天界にいるかのようです。有名な小説、「若草物語」で、ヒロインは「私の勇ましい隊長さん、私はあなたを、心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして愛します。そして、神が私たちを一緒にしている間は、決してあなたを見捨てることはありません。ああ、母よ、二人が愛しい、互いに生きてゆくとき、こんな天国のようになるなんて、私は知りませんでした。」*8

*8 ルイザ・メイ・オルコット 「リトル・ウーマン:若草物語」 (New York: Grosset and Dunlap, 1915),354.

「恋に落ちる」という宗教的経験は、人のうちに最善のものを生み出します。恋人たちは、最も深い海でさえも渡り、最も高い山でも登り、最も過酷な砂漠をも渡り、最愛の人のためなら、どんな危険にも立ち向かおうとします。二人の愛は、勇気と勇敢さの新しい地平へと導きます。16世紀のイタリアの学者の文です。

愛の炎がひとたび心にともれば、臆病が人の心の中で、二度と覇権を握ることはありえない:なぜなら愛する者は、女性の愛にふさわしい者であることを証しようとして、日に千回も命を賭す:もし恋人達の軍団を創り、愛する女性達の目の前で闘うなら、軍団は全世界を制覇することであろう。*9

*9 Baldesar Castiglione, 「廷臣の本」 Charles S.Sigleton 訳 (New York: Doubleday & Company, 1959), 257

「恋は盲目」という慣れ親しんだ表現にも、真理がたくさんあります。人が本当に恋したなら、互いに最善の部分だけを見て、欠点にはあまり目が行きません。愛が心の目を開く限りにおいて、二人は全世界で、最も素晴らしい人物を見て、決して他の人を求めません。このとき、姦淫の思ひは、ひとかけらもありません。二人は「唯一の真の愛」を見つけたのですから。

しかし、はじめにいったように、どんな間柄であっても、「時と季節」があります。言い換えれば、最高の気持ちで結婚が始まったとしても、本当に決裂する時もあり、二人の間が、本当に「天国のよう」*10 であるか疑い出すこともあります。神が、二人の間柄の真ん中におらず、個人あるいはカップルとして成長してゆくという互いの認識が欠けるなら、必ず起こる結婚の危機に立ち向かうことができます。この試練の時にこそ、戒を思い出して、実践してゆくことが必要です。

*10 全世界の聖典は、離婚を許しており、特に姦淫の場合はそうです。しかしこの章の主眼は、「赦し」にあります。夫と妻が祈りによって、神との関係を育て、互いの関係をはぐくもうと努力するなら、結婚の内にある問題に対処することができて、関係を崩壊に持ち込む落とし穴を避けることができる、というのが私たちの信条です。二人が、心から、どんなことをしても、その関係をもとに戻そうとしないなら、「天国の結婚」でさえ、生き地獄となってしまいます。離婚の決断は、結果がどうなるか、そして別居等の別の選択肢の徹底的な検討なしに、行ってはなりません。結婚関係をもとにもどそうとする前に、時を置くことは、いい働きかけとなります。

何らかの理由で、自分の妻を離婚することは法にかなっているかと、イエスがパリサイ人に問われたとき、イエスは、神の最初の計画を持ち出して応えられました。

「創造者は、初めから人を男と女に造って、『それゆえ、人はその父と母を離れて、その妻と結ばれ、ふたりの者が一心同体になるのだ。』と言われたのです。それを、あなたがたは読んだことがないのですか。それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。』(マタイ19:4-6)

イエスの応えに満足せず、パリサイ人は、さらにこういいます。「では、モーセはなぜ、離婚状を渡して妻を離別せよ、と命じたのですか。」そこで応えた、最も重要なイエスの応えは、こうです:

モーセは、あなたがたの心がかたくななので、その妻を離別することをあなたがたに許したのです。しかし、初めからそうだったのではありません。(マタイ19:8)

イエスは、創造のはじめの計画に、彼らに戻そうとしました。結婚の当初計画です。はじめから、離婚という考えはありません、なぜなら結婚した二人の心には、優しさと赦しがあふれているからです。二人は神と結ばれているため、二人の関係は、天界の関係です。

不一致が起こったとしても、肉の心は、もう石の心とはなりません。「モーセは、あなたがたの心がかたくななので、その妻を離別することをあなたがたに許したのです。しかし、初めからそうだったわけではありません」。結婚の中に、神がいらっしゃるなら、意識して互いを傷つけ合おうとする気持ちは起こりません。そしてもし、愛する人に苦痛を与えたとしたら、自分の非を認め、詫びて、仲直りします。同じように、連れ合いによって傷つけられたなら、何が起ころうと、愛の聖なる炎は、なお明るく輝いていると思い、すぐに赦すべきです。

自分の非を素直に認めて、互いに赦しあうたびに、その関係には、新しい始まりが与えられます。ダビデの祈りが、私たちの〈いのち〉のうちで日々の現実となります。

神よ。私にきよい心を作り、ゆるがない霊を私のうちに新しくしてください。(詩編 51:10)

この美しい祈りは、ダビデがバテ・シェバと姦淫した後に、悔い改めて祈った祈りでだと知れば、より深い意味を得ることができます。ダビデの祈りは、どんなに自分が迷おうが、神の慈しみは、毎朝新しく、求めるならば、神はきよい心とゆるがない魂を、創ってください。きよい心とは、頑なで、人を赦そうとしないものすべてを、清め、純粋にした心です。旧約聖書にあるように、「わたしは彼らに一つの心を与える。すなわち、わたしはあなたがたのうちに新しい霊を与える。わたしは彼らのからだから石の心を取り除き、彼らに肉の心を与える」(エゼキエル11:19)。ゆるがない霊とは、負の感情の激しい攻撃に抗うことのできる、固く強固な意志です。それによって、自分の結婚に心を置き、赦しあい、優しく、祈りの静かな時をもち、たがいに必要なものを、尊重して注目することで、聖なる炎を燈し続けることができます。そして、これが最も重要なことですが、結婚の祝福を含む、すべての祝福の源である、神に心を置き続けることができます。

結婚関係の最初の部分は、大いなる歓喜の先触れです。夫も妻も、互いの最善の部分を見つめ、全霊をもって互いに愛し合い、あらゆる善をささげあい、いつも互いに赦しあいます。これが、あらかじめ備えられる時です。ガリラヤのカナの婚礼で、イエスは数多く行われる奇跡の、最初の奇跡を行われました。水をワインに変えられたのです。(ヨハネ 2:1-11) 同じように、結婚の関係が育ち、発展してゆくと、神は自然的な〈いのち〉の水を、霊的な〈いのち〉のワインに変えられます。これが、結婚の奇跡です。一日ごとに、深く、甘く、豊かに、満ち満ちてゆく愛の約束です。いいワインと同じように、年を重ねるごとに、素晴らしくなってゆきます。二人が、互いを霊的に愛し合い、日々赦しあうことで、必ず最善のものになってゆきます。今日は、ほんの始まりです・・・

課題:結婚を貴びましょう

今週は、結婚を貴ぶことに努めます。結婚を汚すような、どんな話も、冗談も慎んでください;刺激的に誘惑することも慎みましょう。自然的な面で、姦淫的な関係を避けるように、霊的な面でも、負の感情の誘惑を断ち切りましょう。清純と高潔さを保ちましょう;神と(結婚しているなら)あなたの連れ合いに、忠実・誠実でありましょう。結婚や、その他の関係で、赦しあうことを学ぶことで、「実りある心」を養いましょう。神に赦しを請いましょう。他人のあやまちを赦しましょう。姦淫を犯してはなりません。

課題

結婚を貴ぶ

肉体においても、靈的にも、姦淫してはなりません。
関係を清めましょう／赦しなさい。

この戒を守ることで、得た経験を記録しましょう。

さらなる考察と適用へのヒント

瞑想:「私たちの負い目をお赦しください、私たちも私たちに負い目のある者を赦します。」

姦淫とは、純粋なものと、そうでないものを混ぜ合わせることです。この戒を守ることで、自分の思考と情愛を、純にし、汚されないように保てます。ダビデが「きよい心」を求めて祈ったように、自分の〈いのち〉のどこかに、赦しを求め、赦さねばならないことがないか、自分を点検し、探してください。この戒を守る練習を行いながら、「私たちの負い目をお赦しください、私たちも私たちに負い目のある者を赦します。」という文句を用いて、瞑想してください。毎日数分、「私たちの負い目をお赦しください、私たちも私たちに負い目のある者を赦します。」という文句に、心を置いて下さい。そして、そうしている間、結婚を貴ぶことに心を留めることを忘れないで下さい。—あなたの連れ合いとの結婚と、神との結婚です。

文章作成

姦淫で捕われた女性の話を読んでください。(ヨハネ 8:3-11) 自分が告発者の一人だとイメージしてください。手には責めるために、大きな石を持っていて、殺人を犯そうとしています。あなたはこれまでの人生で、慈しみなしに真理を用いたことはありますか？どんぶりに、自分の怒りを正当化したり、他人を責めるために真理を用いましたか？「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。」というみことばの意味を考えてみましょう。

文章作成

さて、今度は、あなたが姦淫で捕らえられた女性だと、イメージしてください。あなたの人生の中で、自分が戒に従って生きなかつたと、正直に認めることができた局面を探してください。神に赦しを求めましょう。そして、「行きなさい。そして、もう罪を犯してはならない。」

活動:過去の清算

静かに反省する時間をとります。ろうそくを灯します。最近、または過去に、意図して、または意図せずして、あなたが傷つけた人を心に描きます。そして再び、神に赦しを請います。そして、それができるならば、その人を訪ね、あるいは手紙を送り、電話をして、あなたがあたえた傷や苦痛に対して、詫言をしましょう。(注:償いをしようとする気持ちが、新たな問題を起こさないよう、注意してください。—例えば、「旧い火種」に再び火をつけたり、人の現在の状況をひっくり返したりしないように) 最後に、あなたを傷つけ、苦痛を与えた人を思い出してください。一人一人、彼らの負い目を赦してゆきます。「心のきよい者は幸いです。その人は神を見るからです。平和をつくる者は幸いです。その人は神の子どもと呼ばれるからです」。(マタイ 5:8-9)

反省／瞑想

すべての宗教の聖典は、「天界の結婚」のことを語っています。—それは人と神の結婚のことです。例えば、イザヤでは、神は、「あなたの夫はあなたを造った者」(イザヤ 54:5)と呼ばれています。アラビア語の聖典では、「私は、汝の内、私自身の例の息をする。あなたが私の恋人であるためだ。なにゆえあなたは、私を捨て、私の他の恋人を探すのか？」(バハオラの秘密の言葉 1:19)。インドの聖典では、「多種多様な生命体はすべて、わたしの子宮であるプラクリティから生まれ、また、わたしが種をまく父である」(バガバッド・ギータ14:4)とあります。反省や瞑想、そして聖典の敬虔な研究のうちに、「あなたの神、夫」から「種」(高貴な思考と愛)を受け入れてください。

一つとなる：内なる結婚

結婚式の中で、二人は「ユニティ・キャンドル」を灯し、二人の <いのち>を結び、一人にするという二人の望みを象徴させます。キャンドルに火を灯すことは、神を自分たちの愛と靈感と指導の源と認めるという誓いをもあらわしています。二人が、神とお互いに、心と知性を開くことで、結婚を聖なる結びつきとするということです。

しかし、人が独身であったり、つれあいが先だったり、離婚したりするならどうでしょうか？ どうすれば、結婚を貴ぶことができるのでしょうか？ この質問に答えるに当たって、「内なる結婚」について語ります—これは、結婚の状態にかかわらず、私たちそれぞれの内で行う結婚のことです。これは、心と知性の結婚であり、意志と知力、思いやりと理解、そして究極的には、信仰と自分の <いのち>の結婚です。自分が知る真理を通して、その相方に愛を表現する限りにおいて、この内なる結婚は人の内で深まってゆきます。深まるにつれ、感じる愛は、真理によって貴くされ、理解する真理は慈しみによって豊かにされます。徐々に、信仰は、真理の神聖な水の中で、澄明となり、愛の聖なる炎の中で純化されてゆきます。そして、その二つは、思考と言動のうちで、一つのものとなります。純化された信仰と、聖化された <いのち>の内なる結婚は、幸福で、充実し、他の人間と良い関係を育ててゆきます。

この内なる結婚の祭壇に、私たちを連れてゆくのが神の目的です。思考と言葉と行いのうちに、愛と真理を結びつけようと努力することで、神への愛情と、他人への奉仕は、強く、固く、揺らぎのないものとなってゆきます：「風のない所ともしびにおいた燈火が、決し

てゆらめくことがないように、心を支配したヨーギーの瞑想は真 アートマン 我に安定して微動もしない」（バガバッド・ギータ 6:19）。

